



映画批評

『古都』

～双子姉妹の衝撃的な出会いと別れ～

塚田三千代（翻訳家・映画アナリスト）

映画『古都』（1963年版）は、川端康成の小説『古都』の最初に映画化である。1963年に製作された、岩下志摩（一人二役）主演による映画である。内容は原作小説とほぼ同じである。

本映画の序盤は、カメラが上空から京の町屋の屋根をゆっくりとパーンして下へ向き、二階建のむしこ窓を撮り、弁柄格子戸をクローズアップすると、それに合わせて低音の男の声でナレーションが聞こえてくる。

——中京の町屋は、明治維新前の「鉄砲焼き」、「どんどん焼き」で、多く焼けうせた。だから、そのあたりに、べんがら格子、二階のむしこ窓の、古い京風の店がのこっているにしろ、じつは、百年とは経っていないのである。太吉郎の店の奥土蔵は、この火に焼け落ちなかったという——

カメラショットが千重子に向けられ、千重子は縁側から中庭に咲くすみれの花を見て、「ああ、今年も咲いた。」「上のすみれと下のすみれは、会うことがあるのかしら。おたがいに知っているのかしら。」とつぶやく。映画は川端康成の小説『古都』と同じ調子で流れるように進んでゆく。すみれの花から物語が始まるのは小説と同じである。



1963年版の映画『古都』は、今は市販DVDで視聴するしかないが、劇場公開とは違って場面索引(場面タイトル)が最初に提示されているので、DVDは場面タイトルを選んで小説の各章を読むのと同じ感覚で視聴して楽しめる利点がある。場面索引の題名は場面の内容を象徴して付けられている。

1963年版の映画『古都』では、「捨て子」、「嵯峨の尼寺」、「織元」、「祇園祭の夜」、「帯の約束」、「夕立」、「竜助の忠告」、「時代祭」、「猪武者の竜助」、「結婚」、「一生のしあわせ」の順に付いているので、これらの場面索引の題名から映画全体のテーマを推測できる。

「捨て子」では、千重子が自分の出生秘密を悩み養父母に問い詰めても、養父母は置いてあった赤ん坊を攫ってきたと言い張るだけである。嘘をつかれていることに気づいて、20歳になった千重子はこれを幼馴染の真一に打明ける。養父の佐田太吉郎は60歳を超え、呉服問屋を引退して、嵯峨か南禅寺の静かな土地に引っ越し、着物や帯のデザイン考案に専心したいと思っている。養母のしげは50歳を過ぎて、千重子に呉服問屋の後を継がせなくてもよい、嫁に出してもよいとは言うものの、先祖代々老舗の問屋を自分の代で廃業するには一抹の寂しさと不安を感じている。世間は変わりゆき土地開発が進み、京の老舗の呉服問屋も時勢に合わせてなければやっていけなくなる苛立ちと不安感がただよう。

「祇園祭の夜」では、その年の夏、祇園祭りの宵に双子姉妹の千重子と苗子が衝撃的な出会いをする。四条橋で大友武男が苗子を千重子と間違えて、千重子のために帯を織る約束をする。これを遠目にみていたのは、千重子、真一、竜助であった。だが、苗子と千重子が双子であることを、本人以外はだれも知るよしもなかった。真一の兄の水木竜助が問屋経営のアドバイスを千重子にしてくれる。千重子は武雄に、北山杉と赤松を組み合わせた模様で、手織りの帯を妹の苗子のためにも織ってやって欲しいと頼む。

「夕立」では、西陣帯を姉妹の絆として、苗子に受け取ってもらうために、千重子は北山杉の村里へ出向く。そして雷雨の夕立に遭遇する。自分の身の危険をかまわず覆いかぶさって千重子を護る苗子。親身の温かさが身近に伝わる。

「時代祭」では、京都の盛大な時代祭の行列、前をゆく稚児たち、竜助が千重子の前に猪武者的に現われて問屋経営をコンサルタントする。武男が苗子に求婚するが…。

「一生のしあわせ」では、12月初旬の事始めの頃、苗子が千重子の家に泊まりに来て姉妹は再会する、千重子は「二人はどっちの幻でもあらしまへん。好きやったら結婚おしやす。私も結婚します。」と苗子に武男との結婚をすすめる。しかし苗子の決意は固く、姉妹はこれを最後に運命的な別離をする。本映画のクライマックスは「夕立」と「人生のしあわせ」の場面である。

映画の物語は、双子姉妹の出生秘密・京都の行事・西陣織の帯・結婚・人生の幸せを主要なテーマにして展開するが、映画の上映時間は約120分であるために、原作を多少ねじらせることはやむをえない。しかし映画全体を通してほぼ原作通りに映画化された。

主演俳優は岩下志麻が一人二役で双子姉妹、長門裕之が西陣織の気質の武男を演じ、養父役の宮口精二の演技もすばらしい。監督は中村登、脚本は権藤利英、音楽は武満徹である。武満徹の音楽が『古都』の物語を引き立てる。北山の斜面に立ち並ぶ杉林、祇園祭、武男の織った北山杉と赤松模様の西陣織帯、すべてがどれも美の極致をとらえている。本映画によって、北山杉の植林を世界的に有名にした。

撮影では、川端康成が本物を撮りたいと望んで、京都太秦にある撮影所の撮影現地に乗り込んで口をはさんだと伝えられている。竜助・真一・千重子の3人がすっぽん料理を食べる場面は、すっぽん料理の老舗「大一」の店の現地ロケが許可されず、撮影所内に実物のセットを建てて撮影したが、料理も本物をという川端の要望に応じて、カメラの撮り直しごとに何度も料理支度をしなおして撮影した、というエピソードが残されている。太吉郎の老舗呉服問屋は敬明商事で撮影されたが、現在はビルに建て替えられている。

本映画は第36回(米)アカデミー賞外国語作品賞にノミネートされて脚光をあび、人工植栽の美しい北山杉林と村里はこの映画によって一躍して世界的に有名になった。後世に古典として愛され続ける映画作品である。

【映画史リテラシー】

- ▼『古都』(1963) 主演:岩下志麻(一人二役) 監督:中村登 第36回米・アカデミー賞外国語映画賞にノミネートされた。1963年1月公開 配給:松竹
- ▼『古都』(1980) 主演:山口百恵(一人二役) 監督:市川崑
- ▼『古都』(2016) 主演:松雪泰子 監督:YUKI SAITO

文部科学省特別選定作品。監督 YUKI SAITO は、アレハンドロ・ゴンサレス・イニャリトゥ（第 88 回米・アカデミー賞監督賞を受賞）の『バベル』、他の撮影現場で学ぶ。

【原作の英訳】

小説の 1 章「春の花」と 9 章「冬の花」及び、その英訳の一部を引用する。

(1) 春の花

もみじの木の幹に、すみれの花がひらいたのを、千重子は見つけた。「ああ、今年も咲いた。」と、千重子は春のやさしさに出会った。
「上のすみれと下のすみれとは、会うことがあるのかしら。おたがいに知っているのかしら。」と、思ってみたりする。すみれの花が「会う」とか「知る」とかは、どういうことなのか。『古都』 p.2

The Flowers of Spring

Chieko discovered the violets flowering on the trunk of the old maple tree. “Ah. They’ve bloomed again this year,” she said as she encountered the gentleness of spring.

The upper violet and the lower violet were separated by about a foot. “Do the upper and lower violet ever meet? Do they know each other?” Chieko wondered. What could it mean to say that the violets “meet” or “know” one another?

The Old Capital p.3

(2) 冬の花

——略——
「また、来とくれやすな。」
苗子は首を振った。千重子は、べんがら格子戸につかまって、長いこと見送った。苗子は振りかえらなかつた。千重子の前髪に、こまかい雪が、少し落ちて、すぐに消えた。町はさすがに、寝しずまっていた。『古都』p.206

The Flower of Winter

“These are for you. Come again. . . please.”
Naeko shook her head. Chieko stood against the Bengara lattice door, watching as Naeko walked away. Naeko did not look back. A few delicate snowflakes fell on Chieko’s hair and quickly vanished. The town was as it should be, still silent in sleep.

The Old Capital p.164

【川端康成 小説『古都』(1962)と英訳】

川端康成の『古都』は海外で評価が高い。それは川端のノーベル文学賞で対象となった小説の題名は『古都』であったと、ノーベル文学賞学術財団が公表した(註 7)ことや最近の英訳者 J. Martin Holman のコメント(註 8)で明らかであり、川端が日本 P.E.N クラブの会長を 17 年間勤めて国際的にも貢献した(註 9)ことで窺われる。翻訳者の J. Martin Holman は『古都』の会話はすべて‘京ことば’で書かれ、暗喩や文化事物の固有名詞も多数で、その英訳が難しい、と後書きしている。確かに‘京ことば’の持つ感性を他言語で伝えることは至難であろうが、‘京ことば’は「古都京都」を表象する一つである。小説『古都』には観光ガイドブックのように名所や行事や伝承品の高質な情報(2.1 で先述)が盛り込まれているが、すべてが「古都京都」の表象である。

小説『古都』の思考の原点となる不安と願望の揺れ動き、愛情、出会いと別れ、消えゆく伝統と文化を今に残し伝える姿勢、ポストモダンへの眼差しは、映画『古都』の底流に歴然として流れている。『古都』(1961-62)を朝日新聞に連載しながらこれに並行して、川端は古都鎌倉と古都京都を舞台にした『美しさと哀しみと』(1961-64)を雑誌に連載する。後者には『古都』に書かれない側面(古都を舞台に作家 vs. 小説のモデル)が書かれている。この時期には最後の中編となる『たんぽぽ』(1964.6-)や未完の作品『たまゆら』(1965.9-1966.3)の連載も始めている。当時の日本の出版業界は最初に新聞や雑誌に連載してその後に単行本にして出版するシステムであったので、川端もそれに従っていた。

※川端康成『古都』(1962). 初作は 1961~62 年に朝日新聞に掲載。(2015).新潮文庫. *The Old Capital*(川端康成『古都』Translated in 1987 by J. Martin Holman.)

映画 DVD:『古都』(1963). 販売元. 松竹. 『古都』(1980). 販売元. 東芝 EMI.

※『古都』(2016). 販売元. オデッサ・エンターテイメント.

※小説文庫本:川端康成『古都』新潮文庫. *The Old Capital* Paperback. J. Martin Holman.

© 2017. 9 m.tsukada. All Rights Reserved.

→『古都』 2016 版